

に心どられて、こたへのしぶれる事もあり、さるをりは、つと立ちて、祖母君のかたに走りゆき、わがさまをまねひつゝ、告しらするとか、暑き日に、幼き君のまつはり給ふは、うるさしなど、なれたるまゝに、こらすをりも、あなれど、又二日三日とひきまされは、何となう、こゝろが、りでものたらぬやう、おほゆるも、深きまにしにやあらむ、

蘆湖紀行 (承前)

和歌子

かくて底倉をいで、より二時間ばかりにして、蘆湖の東岸元箱根に達す。かゝる山中にも町はありと平地に住み慣れたる身はあやしとまで見る。むさしやといふに入る。此家は湖にのぞみて建てら

れたり。雨はまだやまず。

五十

此湖は太古の噴火口なるべしといふ。東北二十丁、南北一里十三丁、周回四里、深四十六仞、形瓢のごとく底は南に薄は北に向ふ。四面悉く山に包まる。湖中に一の半島あり。塔ヶ島といふ。今箱根離宮のあるところなり。と駕の中にて見たる箱根案内といふふみにあり。

わ、蘆湖、巳の年來望めりし蘆湖は今我前にあり身は今や蘆の湖にのぞみて立てり。しかも深き雲霧は平湖を掩ひて岸より一間ばかりの水面を見するのみ。向の岸はいふもさらなり。まぢかき塔ヶ島のかげだに見へず。

なかくにゆかしくぞあるあしのうみ霧のあなたはいかにあるらん

とまけをしみをいふ人あれど、此人とても湖のけ

しき見たしと願はざるにわらず。

天津風たてる雲霧ふきはらへ湖水のけしきし

はしながめん

あやしき女遍照よどつぶやく人あり。やがて霧も
晴れなん、どやすらひつ。うちつれて権現様に詣
づ。即ち箱根神社なり。鳥居を入りて湖にそひ坂
をのぼる。東北に山を負ひ、杉の森いどかうく
し。苦滑に、ともすればころびぬべき道をのぼり
つくして御宮に達す。いとしづかなる宮居なり。
祭神三座、瓊々杵尊、彦火々出見尊、木花開耶姫
尊をいつさまつれり。うや／＼しくぬかづきて宮
をいづ。曾我五郎が昔を忍びつゝ、坂をくだりひ
さしやに歸る。

午飯もをへぬ。高き處にあるが上に雨さへそひた
れば、拾こひしきばかりにて、かくても都はあつ

きにか、どうたがはる。霧はれよ湖見んといひい
ひ椽側にまどむするほど誠や神に通じけん、ささ
の歌やしるしありけん、見るまに霧晴れ、向の岸
までさだかにも見えたるものか。

雲霧のはれつゝゆけはあしのうみうれしや岸
の見えそめにけり

人皆よろこびぬ。望遠鏡どりいだしまたもや霧の
かくさぬほどに、とまもりにまもる。あれは権現
様よ、あれこそ塔ヶ島の離宮よ、なごいひしろふ
ほど、また霧たちて、今までありし岸も宮も塔ヶ
島もたちまちかくれぬ。あ、かくれぬといへばま
たはれてさだかに見ゆ。また見えたりといへばま
たかくす。

雲さりのたちつわかれつあしのうみあなただの
岸の見えかくれする

見えかくる、湖のけしき、見れどもあかず。高き處は天候の變化定なきならひなるをけふこそたしかめ得たれ、と感心する人あり。たえず見ゆるより見えかくれるこそうれしけれ、とよろこぶ人あり。

晴れたらんには倒富士見ゆるなり、と語るをきけばをしきこゝちもせらるれど、またこよとてけふは富士をば見せぬなりいざ、と促す人のあるに、げにも、どうなづきあひてこゝをいでたつ。朝來の雨はまだやまず、かむやのうちふるへんばかりなるいとあはれなり。

元箱根をいで、かへりちに向ふほどくだりなれば思の外に早し。雨やうく晴れてあたりさだかに見え来る。の濱りし時にはかゝる山もありしか、かゝる池もありしか、など打見まはずほどに一時

間半ばかりにて底倉なるやどりにかへりぬ。箱根山頂の蘆湖、かのれは雨中にこれを見たり。其壯快なりしこと今もなほ忘るゝ能はず。雲霧深かりしわたりを思ひにこそば涼風今も起るこゝちす。

(終)

公德唱歌 (其二)

學校の詩人

かけくる車走る人 重荷を引ける牛や馬
つとむる人の勇ましく 繁華の土地の賑はしき
道は遊の場所ならず 道行く人を妨げて
人の迷惑忘るなよ
流笛幾聲瀛車つきて 客の乗り降り忙はし
乗りたる人の降りて後 せかず後れず乗るや人
老人婦人子供には 先を譲りて助くべく